

小さい手でピアノを弾くには

ピアノを弾く為には長い指が必要、と大抵の人が思っています。確かに、チャイコフスキーやラフマニノフのピアノ協奏曲を演奏しようと思うと、日本人の標準的サイズでは「ああ、もうちょっと長かったらいいのに、」と思うことがしばしば。シューマンのソナタなどにも、10度が楽々届かねば譜面どおりに弾けないところが多くあります。大きい手の持ち主が有利であることは確かです。しかし、ピアノを練習しはじめる子供の頃、将来手が大きくなるかどうかはよく分かりません。現在の遺伝学の技術を駆使すれば、かなり正確に予言できるかもしれませんが、そんなことまでする人はまずいないでしょう。かといって、手が大きくなってから練習し始めたのでは遅すぎます。ですから、そこは手が大きく育ってくれることをお祈りしつつやりはじめるしかない。すると、せっせと練習をつんでピアノは大変上手になったけれど、指が十分に長くならなかった、という事がしばしば起こります。特に体の小さい日本人女性なら、1オクターブがやっと、という人も多い。そういう場合、「自分は手が小さいからピアノは駄目だ」と、折角熱心にやってきたものをあきらめないといけないのでしょうか。

小さな手、といえば思い出すのは今から10数年前、フランクフルト音大にいたアントンちゃんです。彼女は東欧ルーマニア出身で、14歳くらいの時に最年少で音大に來ました。当時は天才少女の誉れ高い有名人だったのです。ところが数年して、彼女の噂はさっぱり途絶えてしまい、どうなったのだろう、と思っていたところ、ひょっこりと音大の食堂に姿を現したので声をかけました。「どうしているの。」と聞くと、「ピアノの練習なんて止めてしまって、恋愛の冒険をしている。」と言うではありませんか。びっくりしつつも、話を聞いていると、そのうち泣き出して、涙ながらに言うことには、「自分は手が小さくてショパンのソナタ2番がちゃんと弾けない。何ヶ月も必死で練習したが弾けない。あれくらいの曲が弾けないならピアニストなんて無理だからあきらめました。」と言う。確かに、ショパンのソナタ2番は小さい手には不利な曲かもしれない。それにしても、ほかにいくらでもやる曲はあるだろうに、あれ1曲弾けないからやる気をすっかり無くしてしまったとは。彼女の先生がもっと彼女の身になって考えてやったら、と人事ながら残念に思いました。余談になりますが、ドイツの多くの音大にある **Jungstudent** という、特別に才能のある子供を年齢に関係なく例外的に学生として受け入れるシステムは、優秀な人材を育てるうえでいい事ではありますが、重大な弊害もあります。音楽以外の事は何も知らない若年者が、いきなり一人で生きることを強いられるため、生活の指針がたてられなくて、特に他国からやってくる学生は躓くことが多い。ともかく、そうしてアントンちゃんはしばらく低迷したあと、演奏家コースからピアノの先生コースに乗り換えて何とか卒業したらしいから、まあそれはそれでよかったと言えないでもないけれど。

私が京大時代にレッスンを受けた藤村り子先生は手の小さいピアニストの一人で、大変に優秀な音楽家でありながら、ロマン派以降は一切弾かない、という方でした。だから、レッスンもバロックとクラシックの曲目のみで、私が好きなロマン派を聴いていただくこ

とはありませんでした。ある時、先生がモーツァルトの「トルコ行進曲つき」ソナタを演奏された際、全体としては素晴らしい演奏でしたが、1楽章の第3変奏曲のオクターブが非常に苦しげに聞こえたのを覚えています。

私自身は幸いにも体が小さい割には指が長くて、10度もどうにかこうにかなら弾ける、という程度なので、手が小さい、という悩みは持たずに今まで来られたから、小さい手について考えることはあまりありませんでした。

先日、知り合いの日本人ピアニストが、近々ソロの演奏会をするので、聴いて意見を聞かせてほしい、とやってきました。彼女は室内楽奏者としてはドイツ内である程度名の知れた人で、フランクフルト音大で同じ先生についていたことから、現在も時折交流があります。さて、この人が典型的な「手の小さいピアニスト」なのです。

彼女は繊細な感覚の持ち主で、モーツァルトにせよ、ドビュッシーにせよ、細部にわたって日本の伝統工芸のごとく、実に美しく精巧に演奏できます。それだから、伴奏者としての評価は高く、著名な弦楽奏者と共演したりもしているのですが、演奏を聴いた折々、なんだか物足りないものを感じていました。彼女のソロ演奏を目の当たりに観察して分かった事は、オクターブを全てスタッカートで弾いているので厚みがでないのだ、という事です。彼女は手が小さいけれども、一応オクターブは弾けているのだから、弾いたあとで押さえ続けることだって出来るにもかかわらず、すぐに手をあげてしまう癖がある。私はピアノの構造にそれほど詳しいわけではないけれど、弾いた音をペダルだけで伸ばして指を離してしまった場合と、指でも鍵盤を押し続けた場合とでは、明らかに伸ばした音の厚みが違います。ですから、オクターブで弾いた旋律が朗々とつながって聞こえるためには、ペダルだけに頼るのではなく、指も出来るだけ長く鍵盤を押し続けている必要があります、すぐに手をあげてしまっては駄目なのです。私がそのことを指摘すると、彼女は「なるほど、そうかもしれない。今までそういう指摘をされた事がないし、そういう風に練習した事もない。」と言うではありませんか。オクターブでなくて単旋律なら、レガートとスタッカートの違いはだれでも知っているし、旋律をなめらかに弾く為にレガート奏法を必死で練習するのに、オクターブだったらタッチは全部スタッカート、というわけなのです。勿論、手が小さいのだから、3, 4, 5と指を交代させつつオクターブを完全にレガートで続ける事は出来ないだろうけれど、次の音を弾く直前まで前の音を押しさえ続け、少しの間隙をペダルで補うようにすれば、かなりレガートに近い演奏が出来るし、ぐっと音の厚みが増します。そういうことを今に至るまで誰も指摘しなかったとは驚きなのですが、どうやら、彼女が日本とドイツで習った先生方は、彼女がオクターブが苦手なのを手が小さいせいでしょうもないもの、と考へ、改善のアドヴァイスを怠ったものと思われます。

「自分は手が小さいから駄目だ」と思っているピアニスト諸嬢は、そういうコンプレックスを持つ前に、その欠点を補う方法を積極的に考えてトライしてみるべきです。何とか1オクターブが弾けるなら、大抵の曲はこなせるはずだし、手の小さいことによる演奏上の欠陥を最小限に留めることも可能なはずで。